史遊サロン通信
No 266号
平成30年
9月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@jcom.home.ne.jp
新井宏

千坂さんと平山さんのエッセイに共通して現れた「胎内市」と「鳥坂山」

今月号の寄稿には、とても珍しいことがある。それは千坂精一さんの「越後國と下越の揚北衆」と平山善之さんの「板額御前のこと」に共通して、胎内市と鳥坂山という地名が出てくることである。

いずれも新潟県新発田市から北へ二十キロ弱のところにあり、胎内市(たいないし)と鳥坂山(とっさかやま)と読むが、「蝦夷」との関連で紹介されていて、それなりの共通性はある。だが、「それがどうしたの」と言ってしまえば、話がつながらない。話を続ける。

魏志倭人伝に「伊都」という名前が出て来る。

（末盧國から）東南へ陸を五百里行くと、伊都國に到る。そこの長官を爾支といい、副官は泄謨觚・柄渠觚という。千余戸の家がある。世々王があるも、みな女王國に統べて属する。帯方郡の使者が往来して、ここに常にとどまる場所である。

『倭人伝』の中で『王』が居たと明記されているのは伊都国と邪馬台国と狗奴国だけで、四十六・五センチの巨大鏡五面を含み四十面の青銅鏡等を出土した「平原弥生古墳」の地と同定されている。ちなみにこの巨大鏡は、三種の神器、伊勢神宮のご神体の八咫鏡と同型とする説が有力である。

実はこの平原弥生古墳のある地域はかつて怡土郡と呼ばれ、奈良時代には怡土城も築かれていた。そのため伊都＝怡土(いと)というのが定説である。

ところで江戸時代末、十九世紀初に駿河国の豪農、山梨稲川と言う『説文』研究者がいた。『説文』とは『説文解字』のことで、後漢の許慎の作、永元十二年（西暦一〇〇年）に成立した部首別漢字字典で、中国古典研究のバイブルである。清代に入って考証学が興り、中国でも日本でも『説文』に関する研究が一世を風靡した。

その中で、地方に住む農家の研究者山梨稲川の研究方法は、「旁」により漢字を分類する独創的なもので、漢代以前の古音に始めて気付いた学者である。例えば、台・怡・始などが、『説文』では異なる発音であるが古音では全て「タイ」であったというのである。ちなみに、日本漢字音では「タイ」に台胎殆抬紿詒駘佁殆炲珆跆鉛鮐が、「イ」に飴怡詒貽佁珆耆がある。日本には、漢音・呉音など中国の古い発音が残されていたのが幸いした。

山梨稲川は私がラブコールを送る狩谷棭齊や松崎慊堂と共に『説文』の三絶として知られる。それは慊堂が碑文を撰し、棭斎が筆書

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の**九月十五日**です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。

なお、十一月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の**十一月十七日**です。

「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

した稲川の墓碑が静岡駅から徒歩三分の宝泰寺境内に建っているからである。

その一方で、山梨稲川は「知られざる」漢詩人でもある。

それは中国清末の碩儒、兪曲園が日本人の漢詩を編集して『東瀛詩選』として出版した際に、広瀬旭荘、服部南郭、菅茶山、広瀬淡窓らに次いで十四番目に多く、山梨稲川の六十八首が採られていたからである。兪曲園が絶賛するまで山梨稲川はほぼ無名であった。

八月末に高橋さんの原稿が入った。偶数頁におさめるためには一頁書き足すか一頁削るかである。迷わず書き足す。

二ヶ月前の二六五号に、焦るトランプの米朝会談について書いた。金正恩の「核兵器を放棄する用意がある」との一言だけで、関係者が「殿、騙されませぬように」と一斉に声を上げる中、民主党も共和党も長年拒否し続けてきた「直接トップ会談」という「ご褒美」を金正恩に与えた。トランプとしては、「国書偽造」に近い合意であり、事実、米国議会はこんな不明瞭な合意は大統領権限ではなく議会の承認を必要とするといっている。

しかしトランプは高を括っていた。身の回りを対北朝鮮の強硬派で固めた上で、成果の評価を自分自身でやれば、灰色なら白と言いくるめることができる。

しかし、北朝鮮は全く動かない。それどころか、米中の対立が激化するなかで、不和であった中国に近づく。

結局、自称「運転台」に座ったつもりの文在寅が、米国からも北朝鮮からもたたかれ始めた。弱い仲介者の宿命である。

そもそも、ボルトン補佐官は「四月二十七日の板門店南北首脳会談で、金正恩が文在寅に一年以内の非核化を約束をした」といっていた。それを伝えたのは文在寅でしかあり得ない。すなわち米朝会談成立の重要なポイントが文在寅の「仲人口」であった。それが「偽造的」であった可能性が高いのである。。

予想していた通り、トランプは弱い「仲人」をたたき始めた。自由貿易協定の再交渉、駐韓米軍の費用負担、更にはマティス米国防長官は米韓合同軍事演習を中止したことに言及し、「現時点でこれ以上演習を中止する予定はない」と表明した。そうでもしないと中間選挙にプラスに働くはずだった米朝会談が足を引っ張ることになる。

新井　宏

ドンスコイ号の財宝

新井　宏

ニュースは主として韓国の中央日報や朝鮮日報の電子版でよむ。とにかく、あらゆる日本のニュースが掲載されている上、国際ニュースも豊富だからである。もともとは韓国語の勉強のためであったが、最近は一日遅れの日本語版で済ますことも多い。

その中で、気になるのは、金額や重量単位の翻訳を間違えているケースが極めて多いことである。どう考えても理解しがたい記事があり、原文に当たってみると原文さえ間違えている場合が多い。

数日前（七月十八日）の中央日報に、日露戦争で最後まで戦ったロシアの巡洋艦ドンスコイ号（排水量五六八三トン）が鬱陵島沖で見つかったとのニュースが大きく載っていた。それも百五十兆ウォン相当（十五兆円）の金貨や金塊を乗せた「宝船」としての報道である。

発表したのは、ソウルに本社を置く海運・建設専門業者のシニルグループである。シニル側は、その証拠として船体にロシア文字でドンスコイと書かれた写真を公表している。

実は、ドンスコイ号の引き揚げについては戦前の日本でも試み、また韓国でも一九八一年にトジン実業が挑戦、その後もＩＭＦ通貨危機の際に、東亜建設が手を上げ一時株価が高騰したが、その後破産している。

今回もシニルグループの第一製鋼の株価が急騰している。ウサン臭い話である。

さて、こんなウサン臭い話がソウル発のロイター電で世界のニュースとして流れた。日本でも朝日や読売には出ていないようだが、一部新聞やテレビにも報道されたらしい。もちろん韓国での報道は過熱気味である。

まず、韓国の海洋科技院は「ドンスコイ号はすでに二〇〇三年、我々が発見して写真も公開している。我々の位置情報を無断使用してドンスコイを見つけたのだ」と言う。

更には、取らぬ狸の皮算用で、「この船が砲撃を受けて沈没した軍艦ならロシアが所有権を主張する可能性もあるが、韓国の領海で自沈した船で、百年も経過していることからロシアには所有権がない」とか「埋蔵物発掘法により宝物の価値の八十％は発見者が、二十％は国家に帰属する」とか賑やかである。

しかし、百五十兆ウォンの財宝というのはあり得ない話なのである。

こんなことは百五十兆ウォンの純金の重量をちょっと計算してみれば直ぐに分かる。

いま金価格は一トン四五〇億ウォンであるからその重量は三三三〇トンである。そうするとドンスコイ号の喫水七㍍が更に四㍍も上がってしまい、船として機能するはずがない。そもそもドンスコイ号の満載排水量は五八〇〇トンで二百トンも積み増すのさえ要注意なのである。

そんなことよりも、シニルの発表を良くみると、「軍艦ドンスコイには金の延べ棒と金貨あわせて二百トン」とも書かれている。金二百トンなら十兆ウォン弱で発表の十七分の一である。

しかし、それでも過大である。日露戦争の旗艦三笠（排水量一万五千トン）の建造費は百二十万ポンドで金貨十トンである。いくらバルチック艦隊が、途中の港々で金貨精算をしたとしても、金二百トンは多すぎる。

いま、世界最大の金保有国の米国は八千トン余である。最近、最大の金産国となったロシアでさえ、二千トンである。

それなのに財宝百五十兆ウォン説をそのまま報道するなど記者精神の欠如荒廃である。

ここまで書いて、韓国のニュースを読むと、やっとまともな「サギ説」が出始めた。

以上は『計量新報』に掲載した最新のエッセイである。こんな駄文を既に三十編近く載せている。ちょっと面白いので紹介した。

祝出版

瀧澤中著

「大日本帝国」失敗の研究

株式会社ＰＨＰ研究所

本体価格八〇〇円

政治力の衰えが敗戦を招いた

瀧澤さんの快調な『「〇〇大名」失敗の研究』シリーズの**五冊目**です。

歴史から失敗を学べば、未来への道に迷うことはない。それが、筆者が考える「歴史失敗学」の効用である。

失敗という真実は心地よいものではない。まして愛する祖国の失敗を、誰が好んで読み解こうと思うであろうか。

しかし、たとえ不愉快であっても、それが真実ならば、我らは真正面から向き合う必要がある。

なぜならば、同じ文化の上に生まれ育った国民であるならば、時を経ても同じ失敗を繰返す可能性があるからである。

板額御前のこと

平山 善之

日本史上有名な女丈夫が二人いた。ひとりは巴御前、もう一人は板額御前である。

巴御前は木曽義仲の妻、男子の武者を凌ぐその活躍ぶりは平家物語で語られ、能「巴」のシテ（主役）ともなった。義仲が近江国粟津原で敗死する時の別れの場面が涙を誘う。

一方の板額御前は、巴御前ほど知られてはいない。時代はあまり変わらず、戦場で強弓を射て武者を倒し、鎌倉幕府の正史「吾妻鏡」で賛嘆されている。この二人は、強い女性の例として、「まるで巴・板額のようだ」と対にして取り上げられた。しかし、最近の歴史は固有名詞をあまり取り上げないからその名を知る人も少なくなってきた。

今年、私の所属する「えみし学会」は恒例の文化ゼミナールを新潟で開催し、長岡市、新潟市、胎内市、村上市を巡り、県立博物館の浅井勝利氏、胎内市教育委員会の水澤幸一氏の講演を拝聴した。このゼミとは無関係だが、胎内市に鳥坂山（とっさかやま）という山があり、こここそ、板額御前が奮闘し、捕えられた場所であるということを知った。

桓武平氏の末裔、城小太郎資盛という者が建仁元年（一二〇一）越後国鳥坂で兵をあげ鎌倉に背いた。資盛の姨母に板額という女が居りこれが男も及ばぬ武芸者だった。

「又資盛の姨母あり、之を板額と號く、女性の身たりと雖も、百発百中の藝殆ど父兄に越ゆるなり、人挙って奇特という、此合戦の日、殊に兵略を施し、童形の如くに髪を上げしめ、腹巻を着け、矢倉の上に居て、襲い到るの輩を射るに之に中る者死せざる莫し」吾妻鏡・建仁元・五・一四

しかし、幕府方は佐々木三郎盛綱を大将に上野・越後・佐渡・信濃の兵を催して攻めたから、資盛は敗北し、板額は矢傷を負って捕虜となり鎌倉に連行された。

「左金吾（頼家）其體を覧る可きの由仰せらる、仍って清親相具して御所に参ず、左金吾簾中より之を覧る、御家人等群参して市を成す、重忠、朝政、義盛、義村已下侍所に候す、其座の中央を通り、廉下に進み居る、此間聊かも諛気無し、凡そ勇力の丈夫に比すと雖も、敢て對揚を恥づ可からざるの粧なり、但し顔色に於いては、殆ど陵園の妾に配す可しと云々」吾妻鏡・同・六・二八

後宮の女性ともいうべき絶世の美人で武芸の達人、鎌倉の男どもはこれを見ようと集まったのである。諛うところ少しも無く、堂々としていたという。

彼女は流刑になるところを甲斐国の阿佐利與一義遠という御家人が妻に貰い受けた。

胎内市の水澤氏は、この板額御前を、城氏の一族とする通説に対して異議を唱えて「姨という字は、大漢和辞典では母の姉妹を第一義にあげており、資盛の母の妹、即ち姻族であろう」としている。（「奥山荘城館遺跡」）

これによって、武内涼という作家が想を得て、彼女を蝦夷の子孫とする小説を書いた。「「越後の女傑」という題の短編で、今年三月に新潮社が出版した「敗れども負けず」という本に収められている。（初出・「小説新潮二〇一六年一〇月号」）

寄せ手の大将佐々木盛綱は平家追討の功臣であったが、出家して西念入道と称していた。彼も、熊谷直実の如く過ぎし戦で無常を感じたところがあったのであろう。

小説では、挙兵の理由を尋ね降伏を勧める軍使を資盛に送った。城中で開かれた軍議の席上、板額御前は甥の資盛に言う。

「あたしの中には蝦夷の血が流れている。お前の中にも、半分流れている」

板額御前の右手が、鍛え抜かれた左腕をつかむ。己の中で脈打つ血流の響きを掌を通して聴いていた。

「西の者たちと違い、森を開かず、森の中で生き、獣を狩り、その狩った獣を神として崇めながら生きる、誇り高き狩人だ。狩人は優秀な戦士どもあった」

板額御前はつづける。

「ところが蝦夷は常に、朝廷や武士に敗退してまいった。騙されてまいった。

阿弓流為と田村麻呂の戦い。前九年の役。後三年の役。奥州藤原氏の討滅。

都が富むために、いや、都にいるほんの一握りの者たちが富むために、北の国々は常に収奪され、多くの者の命や暮らしが、踏みにじられてきた。左様な怒りを背負ってあたしは武芸を磨いてきたのだ」

「・・・・」

「阿弓流為が斬られるのを、田村麻呂は知らなかったろう。阿弓流為の言い分のいくばくかは、都で聞き届けられるとおもっていたろう。ところが阿弓流為は騙し討ちにされた。

西念という男は、信用できるのかもしれない。だが、幕府で力を振るう者たちはどうか？西念が田村麻呂でお前が阿弓流為になる恐れもあろう」　（中略）

哀しみの潤みがうつむき加減になった板額御前の双眸で光る。

「蝦夷は、狩りで倒した獣を、神として崇め、感謝の念をいだきつつ喰らうだろう。そういう気持ちを今、天下の大権をにぎる者たちはもっているのか？

あたらしい天下人が世を治める。新しい時代がくる。大いに結構。

だけど、負けていった者たちにも・・おのおのの思い、大切にしてきた暮らし、生き方が、あったはず。それを忘れてもらっては困る。

そういう気持ちが籠った矢を、あたしは鎌倉方に射たかった。だから今、鳥坂に、いる」

武内涼、四十歳、時代小説作家として注目を集めている。

ところで、板額御前の再来ではないかと私が秘かに思っている人がいる。

白崎映美、鶴岡市出身の女性・ヴォーカル。二〇一一年の大震災以後、「東北６県ろーるショーー」という催しを主宰、「まづろわぬ民」「当たり前だ節」「とうほぐまづりのテーマ」「東北第一応援歌」など印象的な数々の歌を引っ提げて全国、特に東北地方の人びとを激励して巡っている。

えみし学会の会員で福岡大学准教授岡本雅亨氏（「出雲を原郷とする人たち」の著者）が白崎さんに注目し、「まつろわぬ人々」でなにかできないかと画策している。

私も柏市で路上のライブショーを見て以来小柄な全身を使い蝦夷の思いを込めたように歌う迫力に、魅了されている。

越後國と下越の揚北衆

千坂　精一

私は中世という時代にとっぷり漬かって室町時代の関東管領だった上杉氏歴代の生き様にのめり込んでいたので、その守護国だった越後（新潟県）へは取材でよく出掛けたからいまでも地名を耳にすると懐しく思いだされる。

越後は縦に長い大きな国である。鎮西八郎源為朝も唖然とするに違いない巨大な弓のような形状をしている。

弦の前は日本海が広がり、弓幹の背後は越後山脈を境にして山形、福島、群馬、長野の四県と接している。

とにかく南北に長い国だから現在は三分割して西部地域を上越、中部地域を中越、北部地域を下越と称んでいる。

大化改新後に高志（越）國が成立したが、越後はまだ高志國の北部にすぎなかった。

そこへ大化三年（六四七）に渟足（新潟市中央区沼垂東・西）に柵がつくられ、翌年には磐舟（村上市岩舟）に柵がつくられて、蝦夷鎮撫の最前線になったことから推してここが蝦夷との接触地点すなわち大和政権北上の前線基地だったことがうかがえる。

西蒲原郡巻町（新潟市西蒲区巻）の角田山（四八二メートル）麓に日本海側最北限の前方後円墳菖蒲塚古墳がある。

また『古事記』に大國主命が高志國に棲む奴奈川比賣のところへ求婚にきた歌謡を載せている。

このことは出雲國と高志國はこのころすでに日本海で通じていたということになる。

現在糸魚川市から日本海に出る姫川はむかし沼川といった。

『倭名抄』に頸城郡沼川郷とあり、奴奈川比賣はこの名による女神なのであろう。

糸魚川市に姫を祀る奴奈川神社がある。

姫川近くの長者ケ原遺跡（糸魚川市一の宮）や寺地遺跡（同市青海）からヒスイの玉や加工場が発見されていることからこの地がヒスイの生産地であり、縄文時代ここでヒスイの玉造りが行われていたと思われる。

奈良時代初期の持統四年（六九〇）ごろ高志國は越前國と越中國にわかれたが、この時点でもまだ越後はなく越中國の北辺にすぎなかった。

大寶二年（七〇二）になってようやく越中國のうちから頸城、魚沼、古志、蒲原の四郡を分割して越後國が独立した。

南端は越後山脈を境にして信濃國と接し、南西端は飛騨山脈を境にして越中國新川郡と接することになった。

北辺の蒲原地方は信濃川、阿賀野川、荒川、三面川など大小河川が多く、氾濫を繰返し、蒲の生える湖沼地が多かったので蒲原といわれたという。

平安末期から鎌倉期にかけての中世初頭越後に君臨した豪族は、蒲原地方を根拠にした城氏であった。

城氏は平國香の二男繁盛（嫡男貞盛系が清盛にいたる）の二男惟茂系である。

永久五年（一一一七）検非違使廳が越後國住人平永基のところにいる謀反人源義親（義家嫡男）を召し出すよう命じている。

その後、永基の子孫は平氏政権下に越後國の豪族として知られるようになる。

治承四年（一一八〇）源頼朝が平氏追討の反旗を掲げると永基の嫡男資永は頼朝に加担して越後國の木曽義仲を攻めた。

資永の死後は弟資職が城氏の頭領となり、蒲原郡白河荘（北蒲原郡）を本拠地にした。

養和元年（一一八一）資職は信濃國に出兵して横田河原（長野市）で義仲軍と合戦して敗れ、會津に落ちていった。

義仲は破竹の勢いで平氏を破り西海に走らせて京に入り、壽永三年（一一八四）征夷大将軍に任ぜられたが、頼朝の弟範頼・義經の軍と戦って敗れ、近江國粟津で敗死した。

代わって後白河法皇から平氏追討の院宣を受けた頼朝は、京にいる範頼・義経に平氏滅亡を命じた。

ここで義経が八面六臂の大活躍をする。

すなわち二月に一ノ谷（神戸市須磨区）、翌年二月に屋島（香川県高松市）で平氏軍を破って西海へ追い詰め、三月に長門壇ノ浦（山口県下関市）でついに滅亡させる大手柄を立てた。

しかし、義経は頼朝の許可なく検非違使、左衛門尉の任官を受けてしまったことから逆鱗に触れ、身の危険を感じた義経は逆に頼朝追討を奏請して院宣を受けたが、烈火の如く起った頼朝の奏請で義経と叔父行家追討の院宣が出てしまい、義経は追われる身になってしまった。

頼朝は急ぎ奏請して日本國總追捕使と總地頭に任ぜられると、守護、地頭を設置した。

城氏没落のあとの下越地方へは特に陸奥國平泉の藤原秀衡を頼るに違いない義経捕縛の任を帯びた鎌倉幕府の御家人たちが地頭となって乗り込んできたので、下越地方は関東御分国の様相を呈した。

この鎌倉幕府御家人の末裔たちは室町幕府になっても臣従しようとしなかった。

そのため、室町幕府ははじめのうち手をつけられずに放置した。

下越とは阿賀野川の北の蒲原、岩船地方をいい、阿賀野川はむかし揚川といったことから鎌倉幕府御家人末裔の豪族たちのことを『揚北衆』といった。

頼朝が据えた御家人の配置をみてみると、

○白河荘（水原町、安田町、京ケ瀬町、笹神村で、現在の阿賀野市）

もとは藤原摂政関白家の荘園だった。

平安時代末期、平維茂の後胤城資職が越後守となって支配し、下越一帯に根を張ったが、一三世紀のはじめに滅亡したあと大見氏が地頭に補任されて土着した。

その後白河荘内に分派して、水原（水原町）、安田（安田町）、山浦（笹神村）などの土豪となった。

○加地荘（加地川北岸の加治川村、紫雲寺町で、現在の新發田市）

○豊田荘（加地川南岸の新發田市）

加地荘に入部した佐々木三郎盛綱の後裔が広がり、新發田、五十公野を根拠にする新發田氏や加地氏が有力土豪となった。

○奥山荘（鳥坂山を中心とした中條町で、現在の胎内市）

城資盛が最後に立て籠もったところ。

侍所別當和田義盛の弟義茂が地頭として領有し、三浦、和田氏の本拠となった。

和田氏は当時の習慣に従って建治三年（一二七七）荘園を三分割し、中條（中央部）を領した惣領家は中條氏を名告り、北條（北方部）を領した庶家は黒川に住み、南條（南方部）を領した庶家は關澤に住んでそれぞれ地名を姓にした。

○小泉荘（県北の村上市と岩船郡神林村で、現在の村上市）

村上市を領した本庄繁長も、神林村要害山を領した色部氏や鮎川氏も、ともに秩父平氏の後裔で畠山氏と同族であつた。

下越地方の取材は新潟駅から羽越本線を利用したが、揚北衆の拠点はどこも急行の停車駅だったので便利で都合がよかった。

鎌倉幕府御家人の地頭に対して室町幕府は越後守護に足利家外戚の上杉憲顕を据えた。

憲顕は上野國平井（藤岡市）を本拠にしていたので執事の長尾景忠を守護代においた。

景忠は蒲原郡南端の要三條（三條市）に嶋の城を築いて独立を主張しつづける下越揚北衆を統治する経略にあたった。（了）

出雲大社再考（二〇）
空中神殿の謎（4）
まぼろしだった高層神殿

村上　邦治

大社本殿一六丈（四八㍍）説の最大根拠とされた巨大柱出土は、「金輪造営図」に基づく建築工法が実証され、高層神殿の存在を証明できたかにみえた。しかし炭素法や年輪法により、鎌倉期宝治遷宮時の二四㍍正殿柱跡と判明し、高層神殿を裏付けできるものとはならなかった。

『口遊』による言い伝えや、寂蓮法師による証言については、その根拠とされる史料の脆弱さを指摘した。

もう一つ平安期に何度も本殿が転倒したことから、高層の証拠の如く主張される。しかし当時の工法は、掘立柱式であったためであり、定石式にかえて以来転倒はない。高いから倒れたのではなく、掘立柱式のため根元が腐り倒れたのである。平安期に五回倒壊しているが、築造後二五年から四四年経過（二五，二六，二七，四一，四四年後）後に倒壊している事実が、掘立柱式により根元腐敗から倒壊したことを物語っている。

以上により高層本殿実在説は、ことごとくその根拠を失った。さらに次の視点から高層神殿存在に疑問を呈したい。

最大の問題は、歴史学者は指摘しないが、本殿建造費用の問題である。大林組の試算では、高層神殿建造の見積（平成元年時）は、積算すると、総工期六年、総作業員数一二六千人、総工費一二一億円と試算している。この巨大工事は出雲国に臨時に付加された租税・課役（一国平均役）で賄われていた。記録で明確な二四㍍正殿方式の宝治造営費用（高層神殿造営費用の二割程度か）ですら、出雲国の一国平均役では負担しきれず、鎌倉幕府の支援を受けざるを得なかった。正殿は平安期に六回造営されている。しかも五回倒壊している。正殿式より五倍以上はかかると思われる費用は、いかように調達されたのであろうか。経済的に高層神殿造営は耐えられたのであろうか。

第二に平安中期までは、神階は意宇郡熊野大社の方が上位であり、莫大な高層神殿費用を何度も出雲大社のみにつぎ込むことが許されたとは思えない。また平安中期以降は、神仏習合期に入り、名刹鰐淵寺との競合も生じている。多額の神殿費用を独占的に使用することは、許されない情勢であったと思われる。

第三は、造営された時代の経済状況ついてである。平安期最初の永延造営（九八七）時は、八一年、八二年と連続して内裏が焼失しており、その再建が優先されたであろう。二回目の長元九年（一〇三六）時には、その四年前神託と偽って出雲大社造営を企てた出雲守橘俊孝が佐渡に流されるという事件が発覚している。三回目の治暦三年（一〇六七）時には、その六年前に倒壊している。朝廷は陸奥安倍氏反乱の鎮圧に躍起となっており、ようやく六二年に、一一年続いた前九年の役が終わったところであった。

第四回造営の永久三年（一一一五）時はその二〇年前、一〇九六年永長東海地震（M八～八・五）、九九年康和南海地震（M八～八・三）と立て続けに巨大地震に襲われた。伊勢や駿河の大津波や、土佐では広大な田が海に沈む大被害を受けた。まだ西日本は復旧に取り組んでいたと思われる時期にあたる。

第五回久安元年（一一四五）の造営は、材木不足を暗示する永久造営からわずか三〇年しか経過しておらず、その四年前に倒壊したとはいえ、余りに短期間ではなかろうか。六回目の建久元年（一一九〇）造営は、急速に朝廷の権力は弱体化し、源氏鎌倉幕府へ集中の過程にあった。

こうした時代背景を考慮した時、工期六年百億円以上の費用がかかる高層神殿が果たして建造可能であったか、疑問は払拭できない。

次に造営を担当したのは京の官使である。技術指揮は木工寮の長上が行っている。しかし、朝廷や木工長上の造営記録は見当たらない。四八㍍という本殿の造営は技術的に高難

度であり、造営記録がなければ後世に引き継がれない。しかしその記録はこれまで一切発見されていない。

平常では本殿の屋根しか見えないのだが、平成二〇年遷宮のため御神体を仮殿に移された時、本殿が一般公開された。幸運にも本殿の昇殿を経験できた。急な一五段の階段を登り、大床にたどり着く。廊下を一周するだけだが、内殿外壁や八雲の図が見学できた。本殿建造に使われている木造は思った以上の大木で、大床は地上から四～五㍍はあった。内殿は確かに西向きであった。八雲の図は江戸中期に描かれたとは思えない、鮮やかな彩色雲がはっきりみえた。大床の廊下から屋根の千木を見上げると、寂蓮が驚いたように、そびえるように高く見えたのであった。

八丈（二四㍍）の正殿式にじかに登ると、本殿の巨大さが、改めて実感できる。やはり平安期「出雲の大廈」と言われた本殿は、一六丈の高層正殿でなくとも、十分納得できるものであった。

「上古三二丈、中古一六丈、その後八丈」との社伝はあるものの、一六丈の実在を具体的に説明できる史料はなかった。さらに一六丈説への疑問を追加して挙げざるを得ない。

今後新しい発掘や、具体的に高層を物語る史料の発見がない限り、一六丈四八㍍の高層神殿は「まぼろし」と言わざるを得ない。

（この項完）

参考文献
佐伯徳哉『中世出雲と国家的支配』法蔵館
千家和比古　松本岩雄共著
『出雲大社日本神祭りの源流』柊風社

本邦の大和朝年代の問題点（2）

高橋　正彦

A　―　緒　論　―

前回は十年以上前の拙論（暦-帝紀-紀年法）のデジタル再版の試みに付いて述べた。是に付いて新井先生から、内容に難点あり（書紀天皇没年に不一致あり？）賛成しないとの御意見を戴く。然しながら、大分考えたがやはり再版には意義があると考えるに至った。

理由は―【真実を世に残す責務】伝統的な文献主義的感覚に対する【新次元的方法論】―の二点である。

B　―【最近における新事実の展開】―

天皇陵の陵形成立における、従前の立論に関して、右著以降に諸技術の進展を見るも、右立論の更なる確認を得た。（特に箸墓古墳で）

そこで本再版においては、主張を単純明快解り易くする為に、陵形設計に見られる【倭国の原初幾何学】を前面に押出す事とした。

以下、箸墓古墳等の精密な陵形確定に関する諸情報の再確認を説明する事とする。

……

① 宮内庁蔵の箸墓測量図（大正九年縮尺1/500）唯一の合法的公開情報であったが、その尺度，方位の精度に付いて、如何に精密に考究してもその客観的確認手段が全くなかった。

② 平成二十五年の箸墓の公共測量（情報公開）然るに平成二十五年に宮内庁の、箸墓の公共測量と図面公開が行われた。是は先の皇室陵墓の形態特定に、決定的意義を有するものであり、箸墓の陵輪郭七十八点に関し㎜単位の正確な測量座標値、及び是に基づく測量図が公開された。

例えば図Ａの44は、皇室所有地に食い込んだ民有地＝和菓子店の塀の角点であるが、座標値は、x＝−162,099.881m，y＝−14,532.432m 是は座標原点＝N37°/E136°（福井県境）より下方 162km＋99.881m、西方 14km km＋532.432m の位置を示す。（末端値は㎜）

【これ等座標値を表示する精密な CAD 測量図上（図Ａでその PDF 図面を示す）で、㎜単位の精密な図上距離が計測できる】

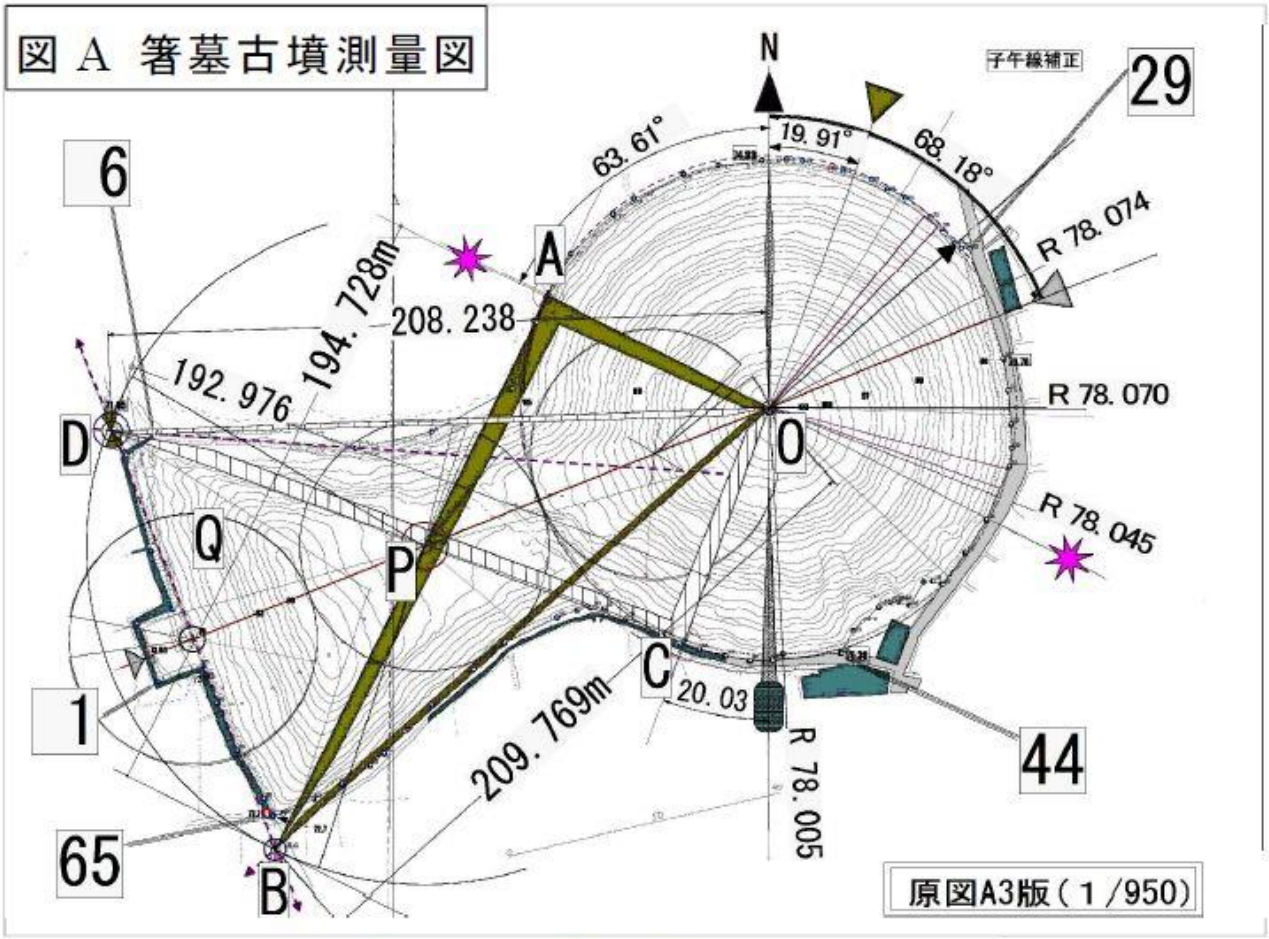
③（是より先）**Google の全世界規模の衛星写真及び Street-View が公開された。**（後者は高解像度の街頭パノラマ写真である）

箸墓陵では、Ａ図の 65 点より 29 点にかけ陵形の高解像写真が得られる。ここより各 76 点はコンクリート境界標であり、円部輪郭の旧街道側は石積み、その左辺は石積の用水壁（箸中大池に至る）である事が詳細に分かる。

---Google-Earth をゲットして確認されたい。（衛星写真を最大倍率にすると、自動的に車上撮影のパノラマ写真が展開する）--

Ｃ --【新事情に基づく陵輪郭の推定】--

① **精密な図上測量が可能となる**



図Ｅ 伏羲女媧と規矩
（山東省嘉祥県武氏祠画像石=京大石刻拓本資料集）

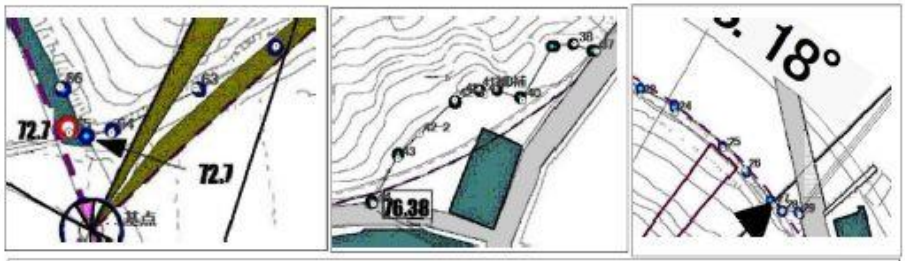


図 BCD 図Ａ中の画像４点補正点（点 6.65.44.29 詳細図）

平成二十五年測量図㋑の上に大正版測量図（透過図とする）㋺をＡ３図=縮尺 1/950 とし、是に座標情報を添付すると１図に重ねる事が出来る。㋺図は紙面の歪み・測量誤差がある模様なので、図ＢＣＤ等４点で紙面歪みを補正する。

----歪み補正により、図上測量値は、現地測量と略同一の成果を得る事が出来る。--

② 明確な輪郭線の確定

古墳の初原輪郭線を地表面下に求め、その規模を大きく求めたい傾向がある。是では箸墓の基底輪郭線は確定できない。是に対し、

●【陵体には平坦な基壇があると見られる】Street-View では図Ａの点Ｂ～44 部分で、この平面基壇部分が認められる。

●後円部は点 20～40 にかけて極めて平滑な円輪郭線を成す【特に平成二十五年度図で顕著】。 =円中点【Ｏ】の位置は極めて明確

●前方部の右側は点Ｂ・Ｃにかけて直線状で、公道に接する【側線ＯＢは点Ｏを通る】

●前方部の【底線ＤＢも明確な直線を成す】。

----以上前提に基づく実測図図上計測----

● 箸墓の円部径= 78.005 m

● OB =209.769 m

● よって AG=194.728 m（計算・実測）=略 2.5R （誤差 0.1%）

----作図基準線の方位計測----

① AO の方位（真北に対し W63.6°）、

② CO の方位（ 真北に対し E19.91°）

③ OP(軸線) 真北に対し、E68.1°

--是は北方向が東 8.1°に偏すと解釈。

(結論)【陵軸線は当時の磁北 E8.1° 左接線は真北基準方位で作図と解釈】される。--これまでの説明はこの結論を引き出す為に説明されたものである。--

（平成二十五年に至り、これまで雲を掴む様であった皇室諸陵において、㎜単位の形態測量できる箸墓の測量座標の情報が開示された。

----この結果、箸墓の平面図は規矩により作図され、平面図は径の１及び２倍の２辺から成る定規が含まれる。更に、この定規の２辺及び軸線方位は磁針と真北方位の２種方位を基準に作図されている。この作図方針は以後の天皇諸陵の基本方針となった。箸墓はその原型である事が明らかとなった。----）

……

D --【以上の幾何学及び測量の意味】--

---- これ等の面倒なデータの決定に何の意味があるのかと感ずる人が多いと思うが、ここから古代の倭国統一に関する、極めて重要な情報が読み取られる。----

① すなわち既に紀元三〇〇年頃には、統一国家に相応しい年次の記録、規矩を用いる精密な巨大土木造成（五寸勾配、鈎股弦法＝前漢代「九章算術」における三平方定理の呼称）の技術があった事、磁針による年次方位決定法、更には伏羲・女媧二神による、規矩を用いた大地創造神話（亦 伊弉諾・伊邪那美神話）が暗示されていた事が推定される。

--図Ｅの伏羲女媧図は後漢二世紀である--一般に記紀の神話儀礼に関する起源は、律令制国家形成の頃に伝承の槐集が成されたかに言われるが、此等には弥生時代に遡る極めて古い記憶の残滓があるのではなかろうか。

㋺ 忘却された衝撃的な三〇〇年間の諸事実

これ等はどれを取上げても衝撃的・視覚的かつ明解な事実であり、殆ど旧石器捏造事件級のインパクトを持つ事実である。このような事実を世に埋もれさせてしま事は出来ない。

そこで無駄ではあるが、旧著のデジタル再版はアマゾンのオンデマンド印刷で出す事とした。是は登録料七千五百円で、Insden をもらい自分で Pdf 原稿を

入力し、注文入金あり次第デジタル印刷・製本し発送するシステムであり、あまり費用はかからない模様である。

E ― 文献資料の扱い＝天皇没年の信憑性】

文献資料を扱う伝統的な視点は、信憑性の有無の確認である。本邦古代史の基本資料である記紀は膨大であるので、全体の信憑性は判断できない。

――ところが、

【書紀記載の天皇没年葬陵年の一定部分は外部年次記録と照合し信憑性がある。外部年次記録とは、

陵の軸線の示す年次方位である】

―― 是が先著の眼目であった。

前回七月通信ではその照合関係の 【応神-允恭】部分を示した。是に対し 根本的におかしい」との含意の御批判を受けた。是を私なりに整理すると、――応神天皇没年＝【庚午】との記載は書紀にはない。――との事の様である。

これに対し、私の文献論的立場は

●書紀・朝鮮資料の干支年次記録は常に信憑性・権威が有る訳ではない。外部資料と照合する場合には根拠ありとする。

（或は年次記録の年次幅は圧縮する）

――との異次元的文献主義にあります。

具体的には、【書紀の天皇没年干支年次は、特定部分の十二支年次に付いては信憑性が有る】

●応神没年は仁徳元年(癸酉)の三年前(庚午)。

確かに書紀本文には、明確な干支年次の記載はない。然し、仁徳即位前に三年の空白ありとの、即位前紀の注記により年次を推定する。この他に仁徳以下、各元年干支と前天皇陵の軸線年次(十二支方位)には相関関係がある。

履中元年庚子反正-丙午 允恭-壬子 安康-甲午

仁徳陵-丑/履中- 未/ 反正-丑 / 允恭-未

――この様に仁徳前後の干支の十二支年次と陵軸線方位十二支には強い相関性が有る。――

――――――――

但し、応神陵は【午】を示すとの一条は誤りで、実際は【子】で、是を六時間戻し午とするも可と解釈しています。 なお陵軸線は真北より微妙にずれており、磁北の経年変化に気付かなければ、年次を示すとは気付かない。

F ― 【本稿結論】―

是等陵軸線の解釈は実物(本稿図Aの様な実測図)を検証しなければ非常に解り難い。是は本稿で概要紹介の前著でB6版で検証しています。又、前著は書紀の年月日を切り出し、大和朝の前・中・後期の経年変化・方位の法則性を暗号解釈した物であり、年月日の要約、地形図を参照しなければ極めて解り難い。要するに書籍一冊丸ごと提示しなければ説明は難しく、相応の意味がある。

G ― 【技術論的補足】―

――箸墓古墳の実測図の精度に付いて――

A図の本図 PDFA3版の元図はA3版 CAD 測量図で、位置計測は㎜単位の精度であるとした。但し、図Aの元図をPC上で拡大表示すれば解るが、測点76点のデジタル表示は、◎点＝0.6 と設定しているが、図測では60㎝径のマークである。ここでもPDFでは米粒大の微点で見え難いので、要所は1.0(径一m)に設定している。大正版測量図の76点の測点は、これでも見え難いので手書きで◎に書き直している。その径を実測すると 1.6m となる。

――この様な大径の測点に対し、実際の座標点(0.6 に設定)とはうまく合致せず、60㎝前後の誤差がある。平成二十五年実測図(宮内庁は CAD データは開示しない)ではほぼ完全に一致するが、今回は急であるので旧版測量図を使用した。(図上距離測定では新旧で結果的には大差はない。強いて言えば、旧版の円部は数十㎝水路側に突出しており歪んでいる様である。

(2018.9